様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２６７

研究課題名（和文）湖水地方の自然保護でワーズワスが果たした役割の再検討

研究課題名（英文）A Reconsideration of Wordsworth's Role in the Nature-Preservation of the Lake District

研究代表者
小田　友弥（ODA, Tomoya）

山形大学・教育文化学部・名誉教授

研究者番号：２００８５４６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：湖水地方の自然保護活動はワーズワスを起点にしている、といった見方が半ば常識化している。本研究は1.樹林の伐採と植林による森林破壊、2.外来者による景観の改造、3.鉄道の導入、の三点に関するワーズワスと湖水地方関連図書の著者の見解を比較し、湖水地方の自然保護においてワーズワスが果たした役割を調査した。その結果、彼は先人の意見をかなり踏襲しており、この見方は修正を要することが判明した。しかし彼らの保護論と異なり、彼の主張は湖水地方の歴史やイギリスの経済・社会情勢を考慮しており、それが彼の論に特別な意義を付与していることも明確になった。

研究成果の概要（英文）：It has been long assumed that Wordsworth is an originator of the nature-preservation movement in the Lake District. In this study I examine how people reacted to the three nature-destroying activities practiced in the Lakes: (1)deforestation of natural forests, and planting of trees which are not native to the district, (2)construction of structures on Belle Isle and Vicar’s Island, and (3)railway construction. This examination has revealed that a considerable number of people had objected against such activities as (1) and (2) before Wordsworth. He followed them in his treatment of these problems. Thus it is not right to see him as an originator. However, there is a remarkable difference between Wordsworth’s objection and his precursors’. While theirs were emotional responses to the destructions, he explained their historic and economic backgrounds. This has made his views quite plausible and contributed to forming the assumption that the nature-preservation started with him.

研究分野：イギリスロマン派詩人、特にワーズワス

キーワード：湖水地方　自然破壊　近代化　旅行案内書　地方史書

１．研究開始当初の背景

Jonathan Bate, *Romantic Ecology* (Routledge, 1991)はイギリス・ロマン派研究にエコクリティシズムの視点を導入した画期的な書だが、そこでベイトは、ワーズワスが湖水地方の自然を保護する機運を生んだ点を重視している。彼のこうした見方は、イングランドのナショナル・トラストの成立過程を扱った書と共通するものである。一例をあげると、John Gaze, *Figures in a Landscape: A History of the National Trust* (Butler and Tanner, 1988)はワーズワスをナショナル・トラストの「守護聖人」と呼び、トラストの出発点を詩人が誕生した 1770 年に設定しているのである(Gaze 9)。しかしながら、湖水地方の自然保護を説くような文言は、1770 年以前の文献にも見られる。そのことから私は、ワーズワスを湖水地方の自然保護運動の創始者と捉える、常識化した見方は歴史的に事実なのか疑問を抱いた。

２．研究の目的

「研究開始当初の背景」で述べた疑問に端を発した本研究は、湖水地方の自然を保護しようとする意識が、何時頃どのような形で生じ、ワーズワスがそれにどのように関わったのかを、18，19 世紀に出版された文献に基づき実証的に明らかにすることを目的とするものである。そしてこの研究の成果は(1)ワーズワスと自然保護の関わりの真実の姿の究明、(2)イギリスの社会において、自然を保護する必要性がどのような過程を経て認識されるようになったのか、を探ることに貢献するものとなる。

３．研究の方法

本研究においては、湖水地方の自然保護意識の形成過程を、現代の通説にとらわれず正確に把握することが不可欠である。そのために私は、18 世紀から 19 世紀に出版された湖水地方に関係する文献を調査した。そうした文献には湖水地方旅行記・旅行案内、湖水地方の古事・歴史書、地誌書などがある。そして、それらに現れた自然保護に関わると思われる記述を項目に分け、年代順に整理した。同時に、ワーズワスがどのような点で湖水地方の自然が危機にさらされていると感じていたかを、彼の著作から読み取った。また、湖水地方と同様に 18 世紀半ばから自然美で注目されるようになったが、ワーズワスのような存在を持たないスコットランド高地地方やウェールズでの自然保護意識について調査した。最後に以上の調査を総合し、湖水地方の自然保護でワーズワスが果たした真の役割を把握しようとした。

４．研究成果

18 世紀から 19 世紀に出版された湖水地方関連図書に現れた、自然保護的発言の主要な論点は、多少便宜的ではあるが(1)樹木の伐採と植林による森林破壊、(2)外来者による景観の改造、(3)鉄道の導入の是非の 3 つに大別される。以下ではこれらの点に関して湖水地方関連図書に見られる発言の幾つかとワーズワスの発言を抽出して、両者を比較する。

(1)樹木の伐採と植林による森林破壊

恐らく、湖水地方の森林破壊に最初に言及したのはクーパー(Thomas Cooper，生没年不明)であろう。ダーウェント伯爵家はダーウェント湖周辺に広大な森林を有していたが、1715 年のステュアート王家再興を目指す武装蜂起に加担して断絶した。その所領はグリニッジ・ホスピタル与えられたが、ホスピタルは換金目的で、1749 年から森林を大量に伐採した。それをクーパーは、1752 年に書いた詩で「獣たちが安心して休み、長らくカラスが巣をかけてきた太古の森が、残忍な力により倒された」と嘆いたのだった。グリニッジ・ホスピタルによる森林伐採には、その後の幾人かの旅行記作者が批判的に言及している。その一例が『1791 年夏のロンドンから湖水地方への旅』(1792)におけるウォーカー(Adam Walker，1739-1821)の証言である。湖水地方で生まれた彼は、10 歳の時に森林伐採が行われる以前のダーウェント湖を訪れ、オークに覆われた光景から深い感銘を受けたのであった。だがそれから 40 年後の訪問では、樹木のない景色が彼を深く悲しませたのであった(88-89)。湖水地方ではまた、木材加工品や製鉄用の燃料にするために、16 年周期に雑木林の伐採が行われていた。これはこの地方の樹木相を著しく貧弱にし、森林と呼ぶにふさわしい樹林帯を無きが等しいものにしていた。

次に植林であるが、湖水地方でも山林の所有者が、18 世紀に進行していた農業革命に触発されカラマツやモミなど、経済的価値が高い樹木を、整然と植樹していた。また大地主には外来植物を好みに応じて移入するものもあった。こうした植樹は、湖水地方に自生する樹木と外来種の差異を際立たせ、自然景観を損なっていた。こうした点についての不満も湖水地方関連図書には早くから登場していた。例を最も詳細な案内書として名高いグリーン(William Green，1760-1823)の『新湖水地方案内』(1819)からあげてみる。この書の下巻でグリーンは、ダーウェント湖の聖ハーバート島の植林が密集しすぎた大きな塊のようで、景色として不均衡だと苦言を呈している(Green 2: 53)。またポックリン島へのカラマツの植林を目障りと評している(Green 2: 64)。

湖水地方の森林破壊についてのワーズワスの見解は詩作品においても展開されているが、最もまとまった形でみられるのは『湖水地方案内』においてである。（以下で『湖水地方案内』の引用やこの書への言及の後に示す数字は、2010 年に法政大学出版局から出版されたこの案内書の拙訳のページである。）1770 年に生まれたワーズワスは、1749

年のダーウェント湖周辺の森林伐採については発言していない。しかし 16 年周期で雑木林伐採が行われ、ラウザー城やライダル・パークなど極一部にしか本格的な森林がないことは彼にとって大変不本意なことで、改善の提案をしている(96)。彼にとってそれ以上に我慢できないのは、植林に関わる二つのことである。一つは移住者がこの地本来のものでない樹木を持ち込むことで、そうした外来種は自生植物との間に顕著な差異を生み出していた。他はカラマツやモミを経済的、あるいは好みから大量に植林することである。ワーズワスが特に嫌ったのはカラマツの植林で、『湖水地方案内』の「湖水地方の景色」という章の「第三部 変化とその悪影響を防ぐための趣味の規則」では、かなりのページを割いてカラマツ批判を展開している(88-94)。彼の「もしカラマツと灌木や森林の別の木々を溶け合わせようとしても、度量が狭いこの木は水平に広がる枝で、まるで大鎌を振るうようにして他の木々を切り倒したり、自分と歩調を合わせてひょろひょろと伸びるように迫る」という描写は、この木が自生植物と溶け合わない点を指摘したものである。

(2)外来者による景観の改造

イギリスでは 18 世紀後半にピクチャレスク趣味が流行し、産業革命等の恩恵で金銭と余暇を手にした人々が、この趣味に叶う景観を求めて各地を旅行した。湖水地方はワイ河畔などとともに、そうした願望を満たす場所として人気を博し、多くの旅行者をひきつけた。彼らの中には、湖水地方に敷地を求め、定住したり別荘を建設するものがあった。こうした移入者の新天地での営みには、湖水地方旅行記・旅行案内などの著者の関心をひきつけるものが幾つかあった。代表的なものがイングリッシュ(Thomas English, 生没年不明)とポックリントン(Joseph Pocklington, 1736-1817)の試みであった。

イングリッシュは 1774 年にウィンダミア最大の島ベル・アイルを購入し、大改造にのりだした。フランス式の庭園を造営し、建物はホア(Henry Hoare, 1705-85)が営んだスタウアヘッド庭園の建築を模したものにした。ホアの建物自体がクロード・ロランの絵画「アイネーイスのいるデロスの海岸風景」の建物の模倣であり、ピクチャレスク趣味、南欧的雰囲気を漂わせるものであった。その後イングリッシュは資金繰りに行き詰まり、1781 年にこの島をカーウィン家に売り渡した。カーウィンはイングリッシュの改造に適宜変更を加え、この島本来の姿に戻そうとした。

以上のような、イングシッシュのベル・アイル改造はどのように見なされたであろうか。1772 年、イングリッシュによる改造以前にウィンダミアを訪れたギルピン(William Gilpin, 1724-1804)は『湖水地方のピクチャレスク美の観察記』(1786)で、ベル・アイルを「ここほど人生の喧騒や妨害を免れていて隠棲を快いものにしてくれる多様な環境に恵まれているところはない」(Gilpin 1: 135)と称えている。ところがイングリッシュが改造に着手すると事情は一変する。1774 年に湖水地方を旅行したハッチンソン(William Hutchinson, 1732-1801)は、『湖水地方周遊記』(1776)において、最初に彼の改造に言及し、美しい自然景観内に建物や庭園を造る際には、想像力と判断力を最大限に発揮しなければならないと述べ、この改造が自然と調和していないことを指摘している(Hutchinson 187-88)。ギルピンは 1786 年に『湖水地方のピクチャレスク美の観察記』を出版する時にイングリッシュの改造について耳にし、彼は「やらないで欲しいと願うあらゆることを実行した」(1: 139n)と酷評している。その後もイングリッシュの改造への批判は続出した。しかし、ベル・アイルに自然を戻そうとしたカーウィンへの批判的言辞は殆ど見られない。

ポックリントンはニューアーク・オン・タインの銀行家であった。彼は 1778 年にダーウェント湖の牧師島（後にポックリントン島とも呼ばれる）を購入すると、島本来の木々を切り倒し、モミを植樹した。邸宅に加えて似非教会などの種々の建物を建てたり、島を要塞化して模造環状列石を作った。さらに湖東岸に土地を求め、バロウの滝近くにカスケード・ハウスを建てたりして、周囲の景観に相当の変化をもたらした。彼から 1797 年に牧師島を購入したピーチー(William Peachy, 生没年不明)は、この島の奇抜な建築物などを取り除くように努めた。

ポックリントンによるこのような自然の変更に対する評価は、次のようなものであった。ギルピンは 1789 年に出版された『スコットランド高地地方のピクチャレスク美の観察記』に、ダーウェント湖が情けなくなるほどの悪趣味に汚されていると聞いた、という文言を挿入している(*Observations on the High-Lands of Scotland* 2: 172)。これはポックリントンによる改造を念頭に置いた発言である。ギルピンはさらに、こうした悪趣味が湖の周囲に広がれば、イギリスで最も壮大な光景が破壊されかねない、と危惧している。ゴシック小説家として名高いラドクリフ(Ann Radcliffe, 1764-1823)は、1794 年に湖水地方を旅行した。翌年に出版した旅行記で彼女は、ポックリントン島は「十二夜ケーキの飾りのように島に乗せられた建築物により台無しにされている」(Radcliffe 450)と批判している。ウォーナー(Richard Warner, 1763-1857)は 1802 年に出版された『イングランド北部州とスコットランド国境の旅』で、湖周囲に下劣な建物（即ちポックリントンの建造物）があることを、ダーウェント湖の欠点としてあげている。所有地の用い方は地主の自由だが、彼が建てたものにより公有財産とも言える自然の素晴らしい光景が害され

る時には、法的規制も必要である。こう述べてからウォーナーは、ポックリントンの建造物は罰金に値すると断罪している(Warner 2: 98-99)。ポックリントンから牧師島を引継いだピーチーは前所有者による改造を取り除こうとした。彼の試みは、サウジー(Robert Southey, 1774-1843)が 1807 年に発表した『イングランドからの手紙』第 42 信(2: 212-13)から窺われるように、概して好意的に受け止められた。

『湖水地方案内』でワーズワスはベル・アイルの岸辺を人工の土手で囲ったことについて「その結果、微細な美に彩られ無限なまでに多様であった光景は破壊され、人工的外観が全体を覆い尽くした」(77)と批判している。また(3)で取り上げる『ケンダル―ウィンダミア間鉄道に関する二通の書簡』(以下では、オックスフォード大学出版局から出ている『ワーズワス散文集』(1973) 第 3 巻に収録されている『二通の書簡』に付された行数により該当箇所を示していく)においてワーズワスは、この島での塀の建設を、未熟な趣味を示す例としてあげている(131-34)。

ポックリントンによる牧師島の改造に関して、『湖水地方案内』でワーズワスは、昔ながらの樹木を一掃して四面むき出しの住宅を高台に建てた、モミの木を隊列を組んだ軍隊さながらに植樹した、環状列石、教会堂、要塞など必然性のないものを築いた、等のことをあげ強く批判している(76-77)。そしてポックリントンの改造を取り除いたピーチーの試みに賛意を表している(77)。

(3)鉄道の導入の是非

1830 年代の初頭には、リバプール―ホワイトヘブン間に蒸気船の運航が始まっていた。これは湖水地方で蒸気機関を交通手段として使用した最初の例であったと思われる。しかし蒸気船の湖水地方の自然への影響に触れた記述はほとんどない。(エドワード・ベインズは『湖水地方への道連れ』(1830) 25 ページで、蒸気船がルーン川の鮭漁に影響している可能性に言及はしているが。)ところが鉄道に関しては事情が大きく異なる。

イギリスでは 1830 年にリバプール―マンチェスター間の鉄道が開設されたのを皮切りに鉄道建設ブームが起こった。そして湖水地方でも、ランカスターからカーライルに敷設される鉄道に、ケンダルを経由してロウ・ウッドまでのびる鉄道を接続させる計画が 1844 年に公になった。その後この計画は終点がウィンダミアに縮小されたものの、1847 年に完成の運びとなった。

この鉄道敷設計画にワーズワスは反対した。彼は 1844 年 10 月にその気持ちを表明したソネットを『モーニング・ポスト』紙に発表した。そして反対の理由などを詳しく綴った書簡を 12 月の 11 日と 20 日の『モーニング・ポスト』に掲載した。これらの文書はかなりの反響を呼んだので、それに配慮した修正も加えながら、全体を一つにまとめて『ケンダル―ウィンダミア間鉄道に関する二通の書簡』というパンフレットにして、翌年の 2 月に刊行している。ワーズワスの反応は素早く、彼に先立つ意見陳述は知られていない。

『二通の書簡』においてワーズワスが鉄道に反対する理由は、次の 4 点に要約できよう。

①湖水地方の自然を享受するには心の準備が必要である。

鉄道の計画者たちは、貧しい労働者などを容易に湖水地方の自然美に接することができるようにすることを鉄道敷設の目的に掲げ、計画に反対するものを貧困者の権利を奪うものと攻撃している(73-76)。それに対してワーズワスは、この地方の自然美は誰もが簡単に享受できるものではなく、楽しむためには訪問に先立ち精神的素養を育む必要があることを、歴史的に示そうとする(89-200)。イングリッシュやポックリントンの改造は、この素養がないものの悪しき例なのである(127-40)。

②湖水地方を湖水地方たらしめているのは、自然美と都会からの隔絶感である。

湖水地方の最も大切なものである自然美と都会からの隔絶感は、鉄道により失われる(70-71)。鉄道は隔絶感を必要としない人々の利用も促進するので、この地方が歓楽地化するためである(279-90)。

③住民は鉄道により大切なものを失う。

湖水地方で暮らすジェントリー階級は、この地の貧困層を物心両面で援助してきた。彼らが鉄道の騒音などを嫌いこの地を離れると、代わりにやってくるのは、この地方に別荘を設けた、金儲け以外に関心がない輩である。そうした人々は自宅と湖水地方を往復するのみで、慈善などに配慮しない(474-90)。これは住民にとって大きな痛手となるであろう。

④鉄道は人間社会にとって大切なものを蹂躙する。

鉄道の計画者は、功利主義の名のもとに金儲けの下心を隠蔽している。この似非功利主義は、人間にとって聖なるものである「自然の神殿」(506)を破壊する。このようにして人為(art)が自然を征服するところでは、利便性は向上するが、失うものの大きさを嘆かざるを得なくなる。『二通の書簡』の根幹は、このような似非功利主義から「道徳心と気高い知的喜び」(494-95)を守ることにある。

以上のように、『二通の書簡』でワーズワスは、鉄道の敷設が湖水地方の自然と人間生活に深刻な悪影響を与えるとして強く反対した。鉄道計画が明らかになってからほどなく公刊されたこの書簡は、最初の反対声明であったが、世間の反応は概して否定的であった。19 世紀には新しい鉄道の建設は国会の審議事項であった。管轄する商務省は、この鉄道計画に関する国会への報告で、桂冠詩人であったワーズワスに一定の配慮を示しながらも、都市労働者が健全に休日を過ごせる場へのアクセス方法を持つことが重要だと勧

告し、この件に関わる法案は国会を通過した（『ワーズワス散文集』3: 334)。

ジャーナリズムの論調も総じて批判的であった。モンクトン・ミルンズ(Richard Monckton Milnes, 1809-85)は『二通の書簡』のワーズワスを批判するソネットを公にしているが、その 6-8 行で「心労と疑念の日々を送る人々が休日に、あなたの詩を光としてこの地方の景色を読もうと大挙してやってくるのを、あなたが残念に思う謂れはない」と皮肉っている。スコットランド出身のジャーナリスト、チャールズ・マッカイ(Charles Mackay, 1814-89)は、1846 年に出版した『湖水地方の景色と詩』においてミルンズのソネットを引用しつつ「ワーズワス氏は現代の偉大な文明推進者［鉄道］を、偏狭なうえに排他的尊大さで見下している」(13)と、詩人の鉄道に対する保守的姿勢にいら立ちを見せている。

19 世紀中期のイギリスは、資本主義の自由放任原則を信奉し、産業革命の果実を享受し始めていた。そのような社会が『二通の書簡』の主張を受容しないのは当然かもしれない。このような民間の空気を反映するように、湖水地方では、例えば 1863 年にペンリス―ケジック間鉄道が開通したように、鉄道反対の機運は盛り上がらなかった。

しかし 1876 年に潮目が変化した。この年明らかになった、鉄道をウィンダミアからアンブルサイド、グラスミアに延長する計画に、サマーベル(Robert Somervell, 1851-1933)が反対に立ち上がり、翌年に『湖水地方における鉄道延長への抗議書』を出版した。この書の中心は「問題の本質」(11-31)という章である。ここでサマービルはワーズワスの『二通の書簡』の 491 行目から 627 行目を連続して引用している。この部分には、鉄道計画者は功利主義の名目で、金儲けを企む下心を隠蔽しているという主張を含んでおり、サマービルが要約の④を重視していることが窺える。

続いて彼は、鉄道延長の問題を二つの視点から見ていく。要約の①のように、ワーズワスは知的レベルが低い労働者などがやってきても、湖水地方を十分楽しめないという理由で、旅行の大衆化を促進する鉄道に反対した。1876 年 1 月の日刊紙に、このワーズワスの言を否定する記事が掲載された。サマービルはその記事に反論し、自然を享受できる労働者は相変わらず少数だという(22)。しかしこれは労働者を責める問題ではなく、彼らを劣悪な境遇に置く社会が悪いのである。したがって、彼らの自然に対する「賢明な受容性」を養うには、時折日常を離れて自然美を味わう機会を鉄道によって与えるより、普段の環境改善を図る方が大切なのである(22-23)。

上述の日刊紙には「仮に計画中の鉄道の沿線に鉱山資源がある場合、野生生物に有害だとか詩人の詩作の妨げになるといった感傷的な理由で、国家を物質的繁栄に導く鉄道建設に反対すべきではない。このような場合、従うべきは経済原則である」といった趣旨のことも記載されていた。それに対してサマービルは、喜びを与え、人々を導くために神が創造された自然は、物質的繁栄より大切なので、鉱山開発のためでも破壊すべきものではない、と反論している(25-26)。人間の幸せは金銭のみに支配されるものではないので、自然が美しい湖水地方は、物質的繁栄を尊重する風潮の枠外に置くべきなのである。

このように『湖水地方における鉄道延長への抗議書』でサマーベルは、ワーズワスの『二通の書簡』をベースに反対論を展開している。彼にとって最も大切なのは、「自然の神殿」である湖水地方を、物質的繁栄しか念頭にない似非功利主義とその申し子である鉄道から守り、「道徳心と気高い知的喜び」の源泉となる自然美と隔絶感を保持し続けることであった。このような考えは、彼の後にこの地の自然保護活動の中心となったローンズリー(Hardwicke Rawnsley, 1851-1920)に継承されたように思われる。

1883 年に「湖水地方を守る会」を設立し「湖水地方の番犬」と呼ばれたローンズリーは、湖水地方への鉄道敷設計画に次々と反対した。一例が、1883 年のケジックからバタミアへの鉄道計画への対応である。この鉄道はホニスターで生産されるスレートを、ダーウェント湖西岸のニュウランズを経由して、ケジックに運ばんとするものであった。この計画に対してローンズリーは、『スタンダード』紙に書簡を送り、スレート採石業者の儲けのために、静けさと休息を求めて湖水地方を訪れる人々を犠牲にするのか、と抗議している。そして「公衆のための行楽と保養の地が企業精神と誤って呼ばれている強欲により年々狭められ浸食されている」と嘆き、真の公共精神が育ち、国家が大衆の健康にも配慮する時代が到来することを願っている(引用は Graham Murphy, *Founders of the National Trust* (London: Christopher Helm, 1987) 82 より)。明らかにこの書簡にはワーズワスやサマービルの抗議書と重なる精神が流れている。このローンズリーが、1895 年のナショナル・トラストの設立とその後の運営に深く関わったのである。

これまで三つの視点から湖水地方の自然保護意識の流れを辿ってきた。そこから次のことが結論として言えよう。

(1)と(2)に関する比較と考察

(1)における概観は、湖水地方では森林の伐採や植林が早くから人々の注目をひき、その弊害を指摘する声が、18 世紀半ばから存在したことを示している。また(2)では、1770 年代から裕福な部外者が湖水地方に住居や別荘を建築したが、彼らの営みが湖水地方の自然と融和しないことへの反感が、1770 年代から相当の範囲に浸透していたことが明らかになった。ウォーナーなどは、ポックリントンの建物に憤り、罰金に値するとさえ言って

いるのである。(1)と(2)において、ワーズワスが自然破壊として取り上げている地点や、そこに自然破壊を認める理由は、ギルピンなどの先人や彼の同時代人のものと殆ど違いがない。その意味で、これらの分野では、ワーズワスは湖水地方の自然保護の先駆者ではありえない。しかし、ワーズワスの自然破壊の捉え方には他者にはない特徴がある。『湖水地方案内』の「湖水地方の景色について」(25-99)でワーズワスは、この地の景観形成の歴史を辿っている。ステイツマンと呼ばれる小自営農民は、自分たちの生活に合うように自然を働きかけてきたが、彼らの営みも時を経るうちに自然による変容を受け、自然に同化するものとなった。こうして形成された素朴な田舎風の景観は 1770 年頃から失われていく。ワーズワスはその原因を二つあげている。一つは湖水地方の景色に惹かれてやってきた外来者が、長年この地方で育まれてきた景観を無視し、周囲となじまない建築物を建てたことである。他は産業革命、農業革命の進行が自給自足の経済体制を破壊したために、ステイツマンが没落し従来の景観を維持できなくなったことである(産業革命については Eric Hobsbaum, *Industry and Empire: From 1750 to the Present Day* (Penguin, 1999)等参照)。ワーズワスは、このような景観変質の実例としてポックリントンなどをあげているのである。確かにウォーナーなどは、ワーズワスに先立ち湖水地方の自然破壊に言及している。しかしそれは、旅行の途中で牧師島などを見て、その場の感情を表現したもので、ワーズワスのような、湖水地方の景観破壊に対する歴史的パースペクテブを持っていない。

(3)に関する比較と考察

(1)や(2)での場合と異なり、『二通の書簡』でワーズワスは、湖水地方に鉄道を導入することの是非に関する論争の口火を切っている。マッカイの論評から窺われるように、この書簡の世評は、発表当初ははかばかしくなかった。それにもかかわらず、『二通の書簡』は以後の湖水地方の開発をめぐる論議に大きな影響を与えている。これにはイギリスの経済・社会状況が深く関わっていた。

イギリスは 18 世紀後半より産業革命期に入り、人口の都市集中化と環境悪化が進んだ。その結果、都市に住居を移した新興中産階級や労働者階級の間に強い田舎志向が生まれたのである(この点に関しては Michael Bunce, *The Countryside Ideal: Anglo-American Images of Landscape* (Routledge, 1994)等参照)。イングリッシュやポックリントンは、中産階級が貴族のカントリーハウスを模倣して別荘を建て、田舎を指向したことの具体例である。また、労働者が憩を求めて湖水地方の「田舎」に向かったことはモグリッジ(George Mogridge, 1787-1854)の『湖水地方そぞろ歩き』(1849)などから窺える。『二通の書簡』での労働者や金儲け至上主義の中産階級への言及は、ワーズワスがこのようなイギリス社会の動向をよく把握し、それが湖水地方に与えるであろう影響について的確に推測していたことを示唆している。それ故にこそ、サマービルやローンズリーが湖水地方の自然保護にあたって、ワーズワスに依拠したのである。

成果のまとめ

本研究は、ワーズワス以前にも湖水地方の自然保護が訴えられていたことを明らかにし、彼が決して保護意識の出発点ではないことを示した。だが、『湖水地方案内』と『二通の書簡』において、湖水地方の歴史とイギリスの経済・社会情勢を的確に踏まえて、この地方の自然を保護する必要性を説いたことも明確になった。これら二つの文書は、後代の湖水地方の保護思想に圧倒的な影響を及ぼした、とギルは言っているが(Stephen Gill, *Wordsworth and the Victorians* (Clarendon, 1998) 247)、その理由はここにある。ただ、そのことが、この分野でのワーズワス以前の発言を消去することにもなった。そして、スコットランド高地やウェールズの保護活動の鈍さは、ワーズワスのような存在を持たないことに起因すると思われるのである。

ワーズワスが湖水地方の自然保護で果たした役割を、実例に基づけ検証した研究はこれまで外国にも存在しなかった。本研究の成果は、エコロジーやエコクリティシズムにおいて、通説に縛られずにこの地方の保護活動の出発点について考察を進めたり、ワーズワスの役割を再検討することに、貢献する面が少なくないと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① 小田友弥、湖水地方の自然保護におけるワーズワスの先駆者、山形大学紀要（人文科学）、査読無、第 18 件第 2 号、2015、29-45
http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/

② 小田友弥、ワーズワスにおける共和主義と自然保護、山形大学紀要（人文科学）、査読無、第 17 巻第 4 号、2013、1-25
http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

小田　友弥　　（ODA　Tomoya）
山形大学・教育文化学部・名誉教授
研究者番号：２００８５４６８